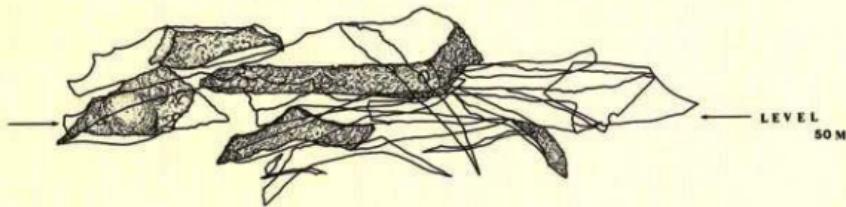
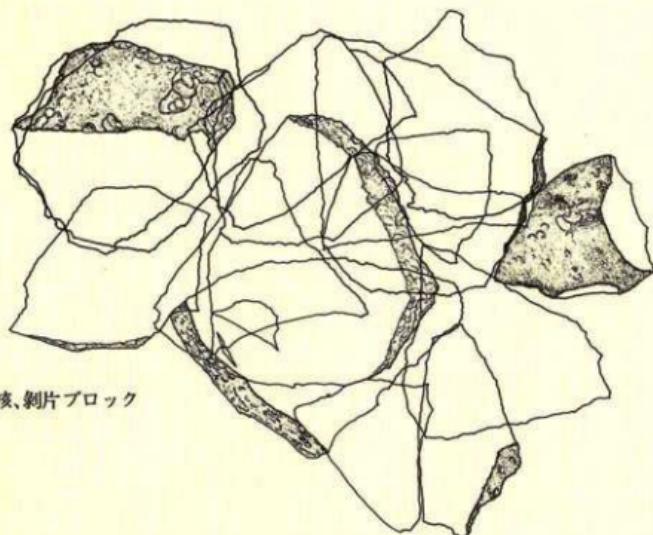


野 畑 遺 跡

NOBATAKE SITE

第 2 次発掘調査概報



SCALE 3:2

1986. 3

野畠遺跡発掘調査団

野 畑 遺 跡

NOBATAKE SITE

第 2 次 発 掘 調 査 概 報

1 9 8 6 . 3

野畠遺跡発掘調査団

序 文

豊中市は、大阪府の昭和61年10月1日現在の推計人口調査によると、416,829人で大阪府下で第4位である。「豊中」とは旧豊島郡の中央部に位置することから、名づけられたというが、その名にふさわしい市となっている。野畠というところは、千里川中流左岸にあたり、豊中台地の北部に位置しており、古墳時代中期から後期の遺跡や古墳群があり、野畠遺跡は豊中市北緑丘2丁と西緑丘3丁目にまたがっている。

野畠遺跡は昭和51年11月から52年2月にかけて、関係者の協力を得て行った第1次発掘調査につづく第2次発掘調査である。

豊中市内における縄文時代の研究は、不明な点が多くたが今回の調査で多くの成果を得た。

猪名川流域の縄文遺跡として、早くから知られていたのは、箕面市瀬川遺跡がある。此の他にも池田市、伊丹市などより數ヶ所縄文土器や石器が採集されているが、今回の野畠遺跡の発掘調査は、今までのどれよりも広範囲で本格的なものであった。しかも最も多くの資料を検出することができ、北摂地方の縄文文化を研究する上で、貴重な調査資料報告をすることができたものと思う。

この調査報告書を発刊するとともに、発掘された遺物資料を市民の皆さんに公開することによって、郷土の文化財に対する理解と認識を少しでも高揚することができれば、幸いと思います。

終わりに、本調査実施に当たり多大の御援助、並びに適切な御指導、御助言をいただいた関係各位に深く感謝の意を表します。

昭和61年3月

野畠遺跡発掘調査団

団長 富田好久

例　　言

1. 本書は豊中市西緑丘三丁目に所在する野畠東土地地区画整理事業に伴う野畠遺跡の第2次発掘調査概要報告書である。
2. 野畠東土地整理組合と野畠遺跡発掘調査団との委託契約に基づき、昭和58年12月21日～昭和59年8月31日まで発掘調査を実施した。整理作業及び概書作成は、昭和60年9月1日～昭和61年3月31日まで豊中市立東丘小学校、北校舎13教室において実施した。
3. 発掘調査、遺物整理、概報書作成、執筆は、橋本正幸が担当した。又、次の諸氏より援助を得た。柳本照男（豊中市教育委員会社会教育課文化財担当職員）、櫛部聰志、服部正子、田上雅則、山元達（同市文化財担当嘱託）、和田秀寿（龍谷大学院生）
4. 下記の諸機関から種々なる御指導御協力を頂いた。記して深謝の意を表する次第である大阪府教育委員会文化財保護課、財団法人大阪文化財センター、西日本編文研究会、豊中市立東丘小学校、豊中市土木部土地整備課、野畠東土地整理組合
（順不同）

野 畠 遺 跡 発 掘 調 査 団 組 織

調　　査　　團

團　　長 富田好久（青山女子短期大学専任講師、豊中市文化財保護委員）
調査委員 亥野 強（奈良県立橿原考古学研究所研究嘱託）
調査員 橋本正幸（豊中市教育委員会社会教育課文化財担当嘱託 昭和60年3月退職）

事　　務　　局 豊中市教育委員会・社会教育課

発掘調査・整理参加者

戸田千恵（大谷大学）、岡村勝行（大阪大学）、前田佳久、中村英彦、大森修、須藤聖子、柿沼菜穂、森久美子、酒井泰子、奥野農子（関西大学）、姫路真保、細川佳子、荻野典子、今井直美、熊田真子、佐藤あゆみ（大手前女子大学）、中村憲代、上田佳子、山田恵美、高橋正則、小鳴久夫、岡崎茂和、竹谷俊彦、牧野暁、園田克也、清水敏彦
（順不同）

表紙カット 石核、剝片ブロック

序 文

例 言

本 文 目 次

I.	調査の契機	1
II.	位置と歴史地理的背景	3
III.	調査概要	5
	調査の目的と方法	5
	基本層序	6
	第1文化層	8
	流水路 第9図 図版1-1~3	8
	土壤12 第10図 図版2-5~6	8
	土壤14 第11図	10
	土壤20	10
	土壤36	10
	縄文セツルメントパターン概要	16
	遺物の残存状況	16
	第2文化層	19
	原位置状況を有する遺物について	19
	土壤群	19
	出土遺物	20
	第3文化層	28
	原位置状況を有する遺物について	28
	土壤、廃棄礫ブロック	28
	出土遺物	29
	第4文化層	32
	出土遺物	32
IV.	結語	34
	調査の成果	35
	あとがき	35

挿 図 目 次

第1図 野畠遺跡の位置図.....	1
第2図 野畠遺跡遠景(南東より望む)	2
第3図 遺跡位置と主要な遺跡分布図.....	3
第4図 周辺地形・調査地点図.....	4
第5図 調査区設定図.....	5
第6図 7-J・Kライン、セクション.....	6
第7図 基本柱状図.....	7
第8図 第1文化層、遺構分布図.....	9
第9図 流水路・遺物・遺構実測図.....遺物1/4 遺構	11
第10図 土壌12 遺物・遺構実測図.....遺物1/8 遺構	12
第11図 土壌14、20、36 遺物・遺構実測図.....遺物1/4 遺構1/10	13
第12図 第2~4文化層、重複分布範囲図.....	17~18
第13図 第2文化層、遺物・遺構分布図.....	21
第14図 第3文化層、遺物・遺構分布図.....	30
第15図 第3文化層、遺物・遺構分布図.....	31
第16図 第4文化層、遺構分布図.....	33

図 版 目 次

図版1 第Ⅲ層	14
1. 10~16-F~M地区 流水路全景	(南より望む)
2. 14~15-H~K地区 盲暗暗渠の検出状況	(北より望む)
3. 14~15-F~J地区 盲暗暗渠の礫、除去後	(南より望む)
図版2 第Ⅲ層	15
4. 3~15-I~N地区 遺構分布面全景	(東より望む)
5. 5~6-L地区 土壌12 銀棺出土状況	(東より)
6. 5~6-L地区 銀棺埋置状況	(東より)
図版3 第Ⅲ層下部.....	22
7. 1~4-I~M地区 遺構分布面全景	(東より望む)
8. 1~2-K~L地区 遺物分布状況	(東より望む)
9. 6-C~D地区 廃棄礫ブロック	(東より)

図版4 第Ⅲ層下部	23
10. 1～2-L地区	土器、石器出土状況 (南より)
11. 2～K-L地区	土器、石核出土状況 (南より)
12. 1-K～L地区	土器、石器、礫出土状況 (南より)
図版5 第Ⅲ層下部	24
13. 4～5-H～I地区	土器、石器分布状況 (南東より望む)
14. 5-H地区	同一母岩による剝片出土状況の接写 (西より)
15. 4-J地区	礫間に挟まれた削器の出土状況 (北より)
図版6 第Ⅲ層下部	25
16. 4-J地区	削器の出土状況の接写 (東より)
17. 1-L地区東拡張区	石核、剝片類遺棄ブロック (南より)
18. 1-L地区東拡張区	石核、剝片類遺棄ブロックセクション (北西より)
図版7 第Ⅲ層下部	26
19. 石錐	1～15
20. 削器	16～24
21. 石錐、25、26・磨製石斧27	
図版8 第Ⅲ層下部	27
22. 深鉢土器	28
23. 浅鉢土器	29
図版9 第V層	36
24. 1～7-C～H地区	遺構分布面 (東より望む)
25. 8～10-E～G地区	遺構分布面 (南より望む)
26. 1～9-J～M地区	遺構分布面 (東より望む)
図版10 第V層	37
27. 6～7-J～M地区	遺構分布面 (南より望む)
28. 12～13-F～G地区	廐棄礫ブロック1 (東より望む)
29. 14-J～K地区	廐棄礫ブロック2 (北より望む)
図版11 第V層	38
30. 4～5-J地区	土壤第40号 (西より)
31. 8～9-L～M地区	土壤第103号 (南より)
32. 6-K地区	土壤第72号 (南より)
図版12 第IV層	39
33. 4-J地区	磨製石斧出土状況 (北より)
34. 4-J地区	磨製石斧のセクション (南より)

35. 4—I 地区 磨石出土状況	(西より)
図版13 第IV・V層	40
36. 第IV層、石鎌 30~49	
37. 第IV層、石鎌 50~69	
38. 第V層、各土壤、石鎌 70~89	
図版14 第III・IV層	41
39. 第III層、石匙 90	
40. 第IV層、石匙 91	
41. 第IV層、石匙 92	
図版15 第IV層	42
42. 櫻形石器 93~101	
43. 磨製石斧 102~104	
44. 磬器 105~106	
図版16 第IV層	43
45. 敲石 107~112	
46. 磨石 113~118	
47. 打ち欠き石錐 119~124	
図版17 第V層	44
48. 土壙103 深鉢土器125	
49. 土壙 36 深鉢土器126	
50. 土壙 40 浅鉢土器127	
図版18 第IV層	45
51. 深鉢土器 (有文土器) 128~131	
52. 深鉢土器 (有文土器) 132~137	
53. 深鉢土器 (有文土器) 138~153	

I. 調査の契機

大阪府豊中市は、いわゆる北摂地方の北部に位置する。市域は、南北10km、東西5km、面積36.6km²に及んでいる。

豊能郡（旧豊島郡）に1町村として存続してきた豊中は、近・現代まで小村落が点在する地域であったが、昭和11年～30年代にかけて各町村が合併し近代都市として発展してきた市である。

かつて野畠遺跡を含む豊中市北東部は、比較的自然の保たれた地理的環境を有する田園地帯であった。しかし昭和30年代後半以降、都市開発の波が千里丘陵に押し寄せるに至り、高度成長に従う千里ニュータウンの急速かつ大規模な土地改変によって、自然環境は変貌を余儀なくされ、大阪北部のベッドタウンと化した地域でもあった。

次に、野畠遺跡の第1・2次発掘調査に至るまでの契機について概述する。

第1次発掘調査

野畠遺跡は昭和51年5月に、豊中市北緑丘2丁目、西緑丘3丁目を行政区画する大阪府都市計画道路小野原一豊中線の敷設工事に伴って発見された。南側の擁壁設置による農地カッティング面に、重層する縄文時代後期の文化層が確認でき、豊中市教育委員会は緊急に予備調査を行う機会を得た。その結果、縄文時代中期末～後期初頭期に比定される文化層を層位的に把握できた。

予備調査の成果を踏まえ、豊中市教育委員会では日本住宅公団、土地所有者側に協力を求め昭和51年12月13日～昭和52年2月28日まで第1次発掘調査を実施した。調査は、小野原一豊中線の南側擁壁設置部と隣接する農地部分126m²を対象とした。その結果、縄文時代中期末～後期前葉期にかけての単一な生活遺構が、限定された調査範囲にもかかわらず密集して発見され、分布範囲もさらに南部に拡がっていることが予測された。以上の諸点は、今後の課題及び留意点として残し、周知化されるに至った。

第2次発掘調査に先立つ分布調査

第1次発掘調査の経緯をもとに、昭和57年度には再度、野畠東上地区画整理事業に伴う埋蔵



第1図 野畠遺跡の位置図

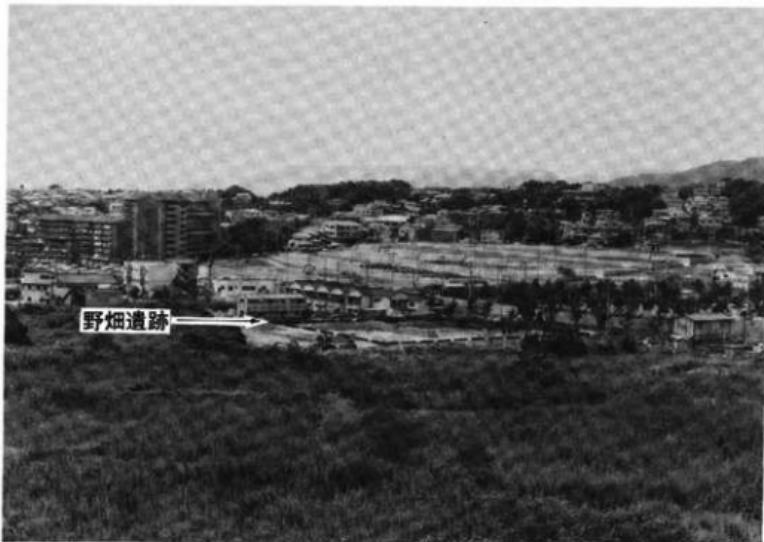
文化財分布調査の申請依頼書が、豊中市教育委員会に提出された。そこで市教委では第1次調査の所見に基き、緊急に分布調査の準備を進め、昭和58年1月30日～2月6日までの約1週間調査区域の南部地域において、任意で $2 \times 2\text{m}$ グリッドを6ヶ所に設定した結果、生活遺構面は当初の予測に反して広域に拡大しており、古代・中世期までに及ぶ複合遺跡であることが追認できた。

以上、第1次発掘調査及び分布調査の結果を踏まえて、豊中市教育委員会と野畠東土地区画整理組合による二者は、区画整理事業着工前に第2次発掘調査実施の必要性について事前協議を行い、全域を調査することで合意に達した。そこで、昭和58年12月に野畠遺跡発掘調査団を発足させ、野畠東土地区画整理組合との間で委託契約が締結された。

記録保存を目的とした発掘調査は、昭和58年12月21日より着手し、昭和59年8月31日をもって完了した。

遺物整理及び概報作成は、昭和60年9月1日～昭和61年3月31日まで、野畠遺跡発掘調査事務所、豊中市立東丘小学校・北校舎13教室において行った。

註：野畠遺跡第1次発掘調査報告書は、1981年度に啓蒙普及本として公表しているので活用して頂きたい。



第2図 野畠遺跡遠景(南東より望む)

II. 位置と歴史地理的背景

野畠遺跡は、豊中市の北東部に位置し、豊中市西緑丘3丁目に所在する。

歴史地理的環境について概観すると、豊中の地形は千里丘陵地域と猪名川沖積平野部に大別できる。該当地域は千里丘陵に付属し、島熊山（標高112m）を頂点として北西部に派生移行する範囲には、小支丘陵群からなる桜井谷丘陵と呼称される地域がある。桜井谷丘陵の中央を横断する千里川は箕面山系の東麓地帯に源流を発し、桜井谷丘陵地域には後期更新世の相当期において、河川浸食作用による桜井谷段丘崖線が発達し、開析谷地形が観察される。また、河川流域において、小規模なポイントバーが形成されている。

野畠遺跡の立地は、埋没冲積低位段丘面上に立地基盤が求められ、緩やかに千里川崖線の北西部にかけて傾斜移行し、標高51m、現河床との比高差は7m前後を測り、背後に中位段丘崖が発達している。

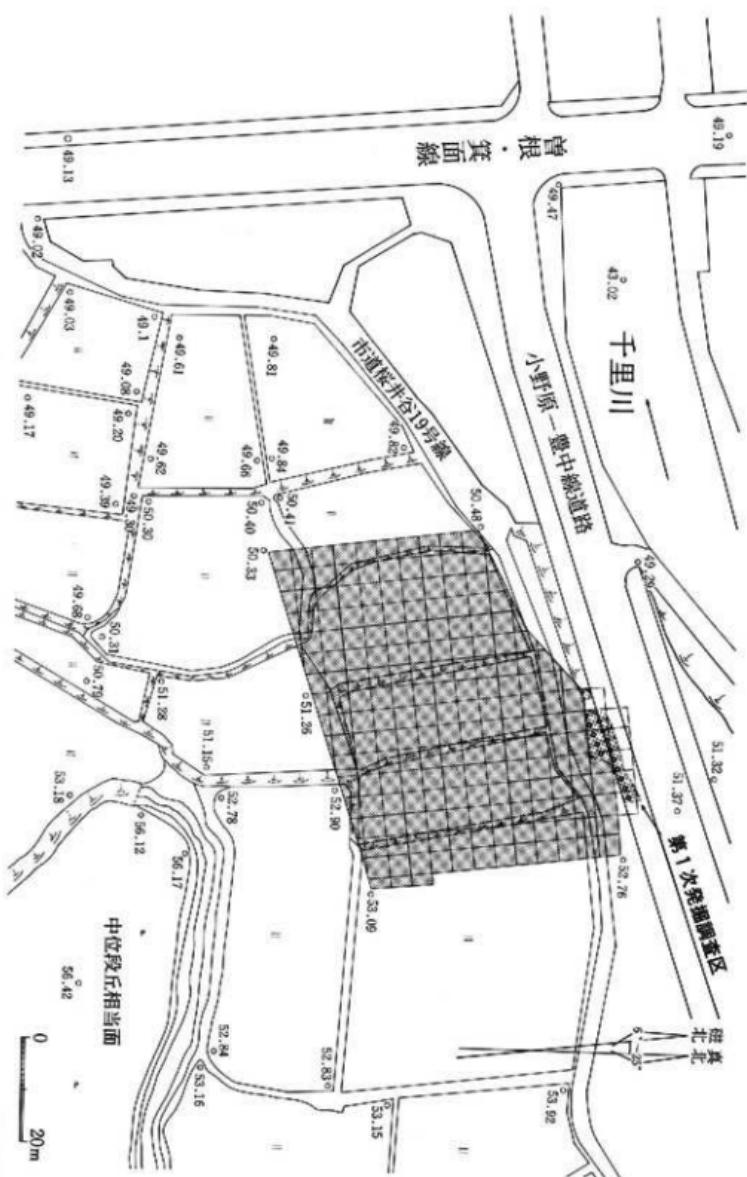
歴史的背景については、居住に適応した桜井谷丘陵は、從来、埋蔵文化財の密集地帯であったが、近年の加速度的な宅地造成開発に伴って保護されることなく埋滅する危機に現在直面している。これまでに豊中市文化財分布地図に登録されている桜井谷流域での遺跡種類別の確認数値は、約65地点に及び、分布地図に周知化（ドット・マップ）され、遺跡種類別・記録保存処理法によって認知されている。

さて、桜井谷段丘崖線の段丘面は、多様な内容をもつ遺跡が多数分布する地域である。主要な遺跡を列挙すると、河川段丘面に生活基盤が要求された柴原遺跡、本町Loc2、新免Loc11などが古墳時代後期以降にかけての集落要因をなした複合遺跡であることが、最近の発掘調査の成果によって明確化されている。丘陵稜線傾斜面には、千里丘陵で最大の分布規模を有する太鼓塚・春日中井山後期古墳、桜井谷古窯跡群と金寺山廃寺などが存在する。すなわち、「新撰姓氏錄抄」によると、律令期に在地の氏族であった桜井宿禰が存知でき、集落跡・後期古墳・寺院址・須恵器生産者集団との密接な関連性が指摘できる地域である。

1. 野畠春日町遺跡
2. 潟川遺跡
3. 宮の前遺跡
4. 待兼山遺跡
5. 待兼山古墳
6. 太鼓塚古墳群
7. 春日中井山古墳
8. 桜井谷古窯跡群



第3図 遺跡位置と主要な遺跡分布図



第4図 周辺地形・調査地点図

III. 調査概要

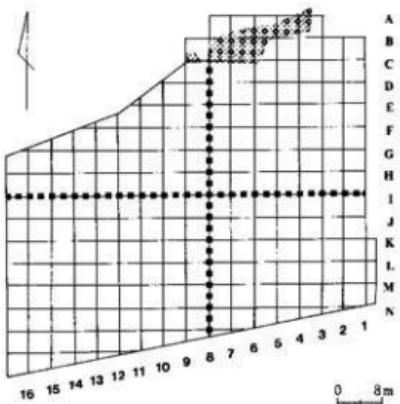
調査の目的と方法

予備調査に基づく所見を考慮し、調査の目的・方法を次のように実施した。

発掘調査対象面積（2,925m²）に於いて、重機掘削を使用し第2層まで出土除去作業を行ない下層部より分層的精査方法を基本とした。地区設定については、8—1ポイントを原点とし磁北方位で4×4m単位の方眼を196区画設定し、地区表示は東西ラインをアラビア数字、南北ラインをアルファベットとし、組み合わせ呼称した。

出土遺物の全点位置記録は、分布密度の集中範囲に限定して資料化を計り、遺物・遺構状況の記録化に主眼点を置き、平面・垂直位置関係（ドットマップ）を原則的に試み、3項目による属性情報を抽出した。

- 土器表裏面の位置関係、石器の方位性・ポジティブ、ネガティブバルブとの位置関係、クリノメーターでの計測による遺物の角度（水平、傾斜、垂直）等による三次元的方法。
- 遺構（土壤）全覆土、包含層を小単位で採取し、アトランダムに2mm、5mmメッシュのふるいを使用してウォーターセパレーション・フローテーションを試みた微細遺物（土器、石器、炭化物）の検出方法。
- 自然科学的分析を目的とするため各層序の土壤、遺構覆土、焼土のサンプリング方法。
- 遺物・遺構（平面・断面）実測図作成については、X、Y、Zで統一したが、必要に応じてAを作成した。



第5図 調査区設定図

基本層序

野畠遺跡の層序成因については、層序基盤となる河岸段丘礫層の上位部に前期完新世期相当の中積被覆粘土層が、層厚を有して埋没段丘面に堆積している。中積被覆粘土層の区分について、第7図の基本柱状図は、東西1~16-Iライン、南北7-D~Mラインを基本とし、8m間隔をもって作成したのである。各層位間では、レンズ状に小堆積する稀薄な細分層を有したが、基本的には第I~V層に大別できる。北西方向に緩傾斜を呈する微地形にある各層位のレベル差を示し、地区間での一定基準での堆積層が地区別に異にし、大別できうる層位は調査区全域に及んでいる。しかしながら、第III層下部に至っては、縄文後期前葉(北白川上層式1・2期)の相当層であるが、第III層の上下間では層理面は存在せず、遺物・遺構のレベルを基準としている。第IV層に至っては、密集度の高い遺物包含層と散漫的に遺物を包含しているセクションとに区別できる。

第I層 耕土

第II層 黄色 (2.5Y7/8) 15mm前後の小礫を含む軟質砂礫土

第III層 明黄褐色 (10YR7/6) 7mm前後の小礫を含む軟質微粘土であるが、下部は有機物により汚染化

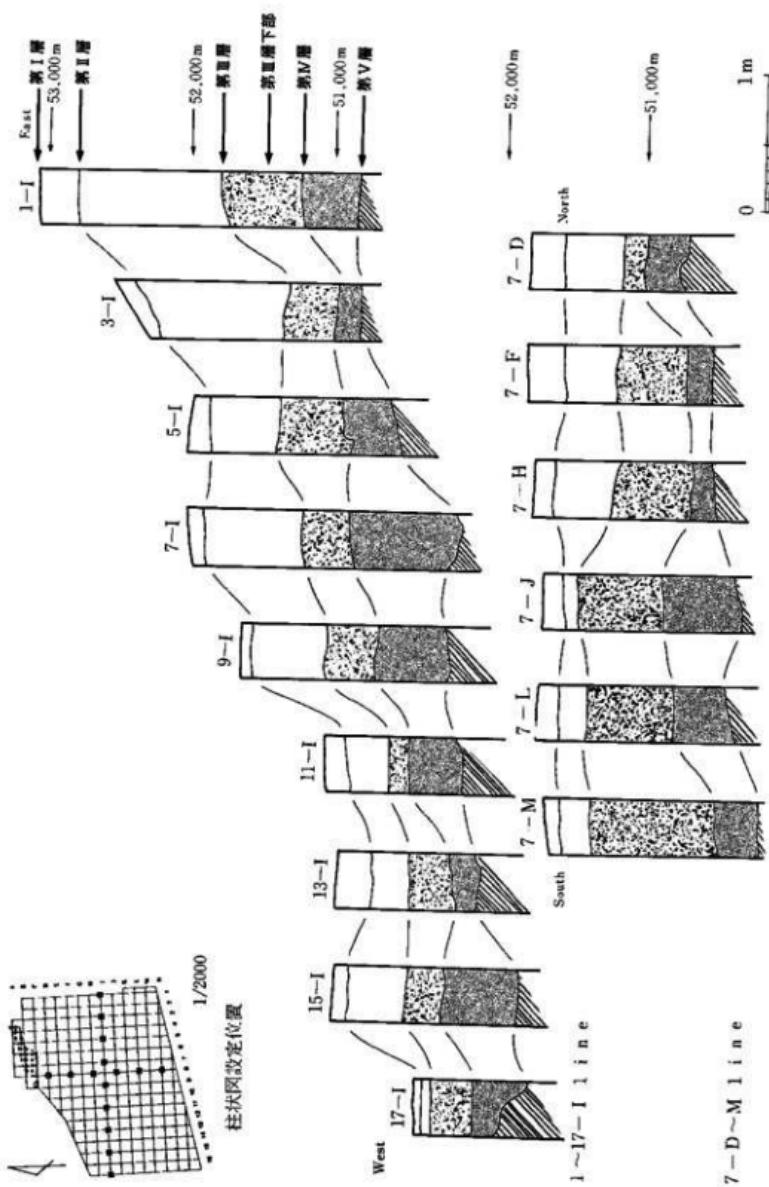
第IV層 灰褐色 (5YR4/2) 7mm前後の小礫を含む軟質微粘性土

第V層 褐灰色 (7.5YR4/1) 5mm前後の小礫を含む硬質微粘性土

註：土色層の識別方については、1980年、新版標準土色帖を参照とした。



第6図 7-J・Kライン、セクション



第1文化層

第8図の遺構平面分布図は、8世紀前半～14世紀にかけて第III層直上に存在する。個々の形状の異なる遺構面を図示したものである。18世紀以降における農地開発によって遺構の残存状況は極めて悪く、同一層位面に近世相当期の擾乱層の存在も認められた。遺構の分布範囲は全域に及んでおらず、3～14-H～N地区にかけて散漫的に分布する。検出遺構は、流水路1条、土壙75基を数え、時期を異にする遺構も存在している。帰属年代の明確な遺物を含む遺構としては、流水路、土壙12・14・20・36で、検出遺構全体数に対する比率は、4%にも満たない数値を示し大部分の遺構は年代的に問題を残す。

流水路(第9図 図版1-1～3)

13～15-F～N地区において、単独で存在する1条の流水路を検出した。水路の規模は、延長34m、分岐点幅4.5m、深さ0.5mを測る。覆土は、レンズ状に堆積する灰褐色系の砂質土、微砂で分層できる。流水路の構造であるが、微地形を利用し、段丘面を屈曲して展開し、背後にある中位段丘の付近から緩やかに継走し河岸方向に排水機能を有したと考えられる。14～15-I～J地区に至って、不整形な分岐点が存在しており、2条の小溝が枝状に設けられる。扇形を呈する排水口から分岐点付近にかけて、水路底面には、挙大の段丘礫、川床礫が設置されており、暗渠排水の施設だと推測できる。

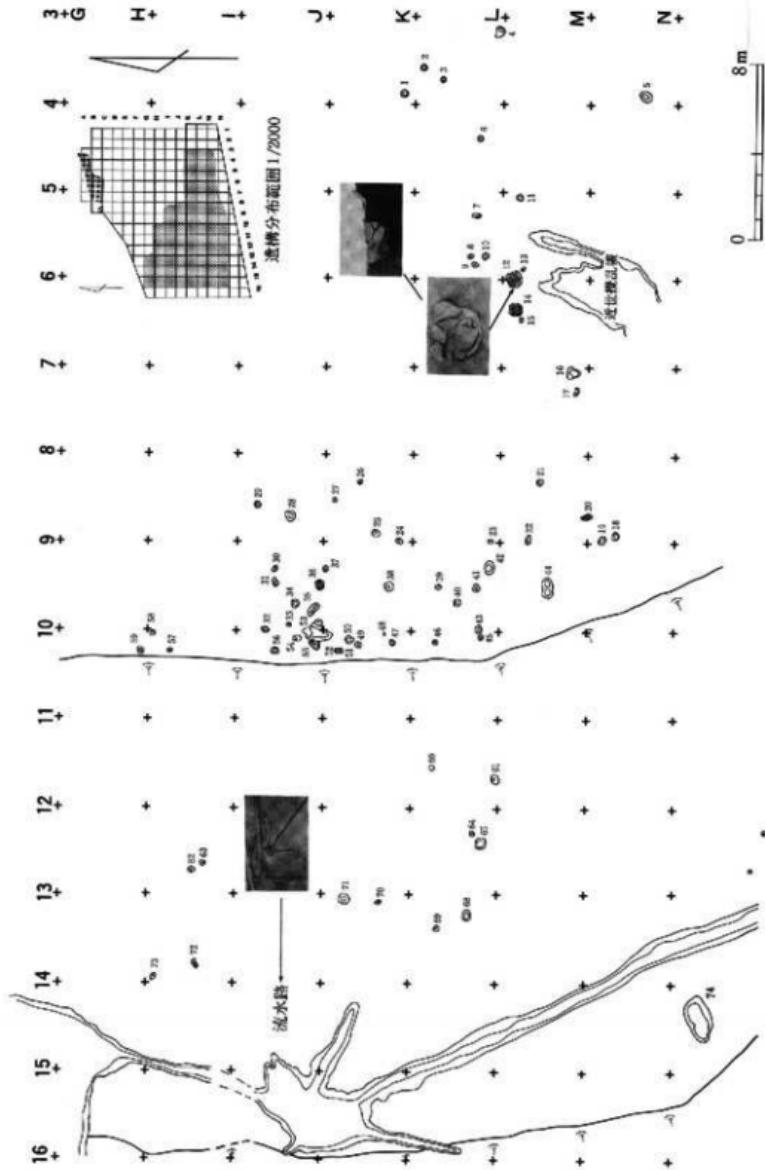
流水路に共伴する覆土遺物については、量的にも僅少であり水路の機能した年代を示す明確な遺物は殆どない。器種としては、瓦器椀、土師質甕、土師器皿、土釜、土師質の三脚器、須恵質甕の細片が概して少量出土した。

図示する瓦器椀¹¹が、排水機能を果していた年代を示すものと推定できる。瓦器椀は、瓦器編年試案IV-1・2期に相当し、14-C地区の排水口より出土した。型態の特徴は、高台を有する底部のみ残存し器面全体的に流水作用による転磨の形跡が顯著で、器面調整等によるヘラミガキは不明瞭。高台は、退化現象が認められ、微粘土のヒモを器面に接合したものである。残存器高0.9cm、高台復元径5.0cm、器壁0.4cmを測る。

土壙12(第10図 図版2-5～6)

6-L～M地区に位置する須恵器大甕転用の埋甕である。土壙の形状は、不整方形のプランを有し、掘り方断面は、不整台形状を呈する。プランの規模は、長径0.75m、短径0.73m、深さ0.3mを測るが、残存状況は悪く、須恵器甕を埋置する土壙掘り方の上位部は、後世の擾乱によって破壊されている。埋甕の埋置状況については、垂直に位置されたものではなく意図的に北向(55度傾斜)に埋置しており、底部から体部にかけて残存し、器体内には同一個体である口縁部の破片が落ち込んでいる。

図示する須恵器甕は、陶邑編年IV型式に相当する。還元焰焼成によって堅微なつくりである



第8図 第1文化層、遺構分布図

が、底部には焼成による歪みが残る。形態的特徴は、口縁端部外面に回転ナデ調整による一条の稜線を形成している。端部内面は、浅く肥厚し横ナデ調整を施す。頸部は残存しないが、口縁下部から頸部にかけて緩やかに外反し体部に移行すると考えられる。体部から底部にかけて外向は、平行、斜格子叩き成形後半スリケシ調整による。内面は、成形による同心円叩きが若干残るが半スリケシ調整を施している。底部上位部には、焼成後、外面より 1.8 cm 前後を測る穿孔が認められる。復原高 71 cm、口縁部復元径 45 cm、体部径 67 cm、器壁 0.7 cm を測る。

土壤 14 (第11図)

6—I 地区に位置し、土壤形状は、隅丸方形プラン、断面台形状を呈する。プランの規模は、長径 0.6 m、短径 0.57 m、深さ 0.2 m を測る。覆土は 2 層に分層でき遺物としては、微量の黑色土器 A 類、土師皿が覆土 1 層より出土した。^{出3}

図示する黒色土器 A 類は、高台を有する底部残片である。風化作用によって器面の保存状況はよくなく、成形、調整は不明確である。高台は、断面逆三角形状の粘土ヒモを器面に接合する。A 類の特徴であるが、内面を灰黒色に焼している。残存器高 1.5 cm、底部復元径 7 cm、器壁 0.4 cm を測る。

土壤 20 (第11図)

8—L～M 地区に位置し、土壤形状は、橢円形プラン、断面半円形を呈する。プランの規模は、長径 0.5 m、短径 0.32 m、深さ 0.07 m を測る。覆土は 1 層で遺物としては、微量の土師器碗が覆土上層より出土した。

図示する土師器碗は、高台を有する底部残片である。風化作用によって器面の成形、調整については不明瞭。形態的特徴は、断面台形状を呈する高台が器面に接合される。残存器高 0.9 cm、底部復元径 8.0 cm、器壁 0.5 cm を測る。

土壤 36 (第11図)

9—I 地区に位置し、土壤形状は、不整円形プラン、断面長方形を呈する。プランの規模は、長径 0.45 m、短径 0.38 m、深さ 0.35 m を測る。覆土は 2 層に分層でき、上層において拡大の川床礫が投棄されている。遺物としては、黒色土器 B 類が覆土 1 層より出土した。^{出4}

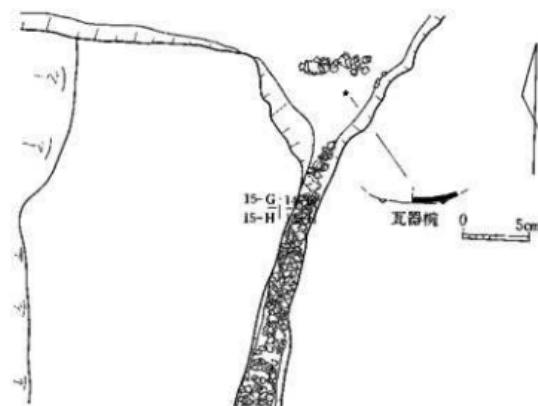
図示する黒色土器 B 類は、口縁部の残片である。内外面を灰黒色に焼し、外向調整は横ナデ調整、内面はヘラミガキ調整を施す。残存器高 3.5 cm、口縁部復元径 15 cm、器壁 0.5 cm を測る。

註. 1 橋本久和「上牧遺跡発掘調査報告書」(『高槻市文化財調査報告書』第13冊 1980)

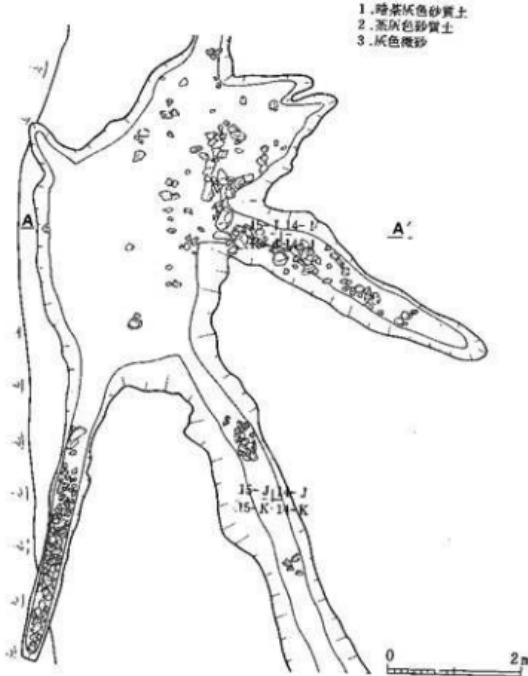
2 中村 浩「和泉陶色窯遺物の時期編年」(『陶邑』大阪府文化財調査報告書 第30輯 1978)

3 田中 雄「古代中世における手工業の発達 (窯業一観念)」(『日本の考古学VI』東京 1967)

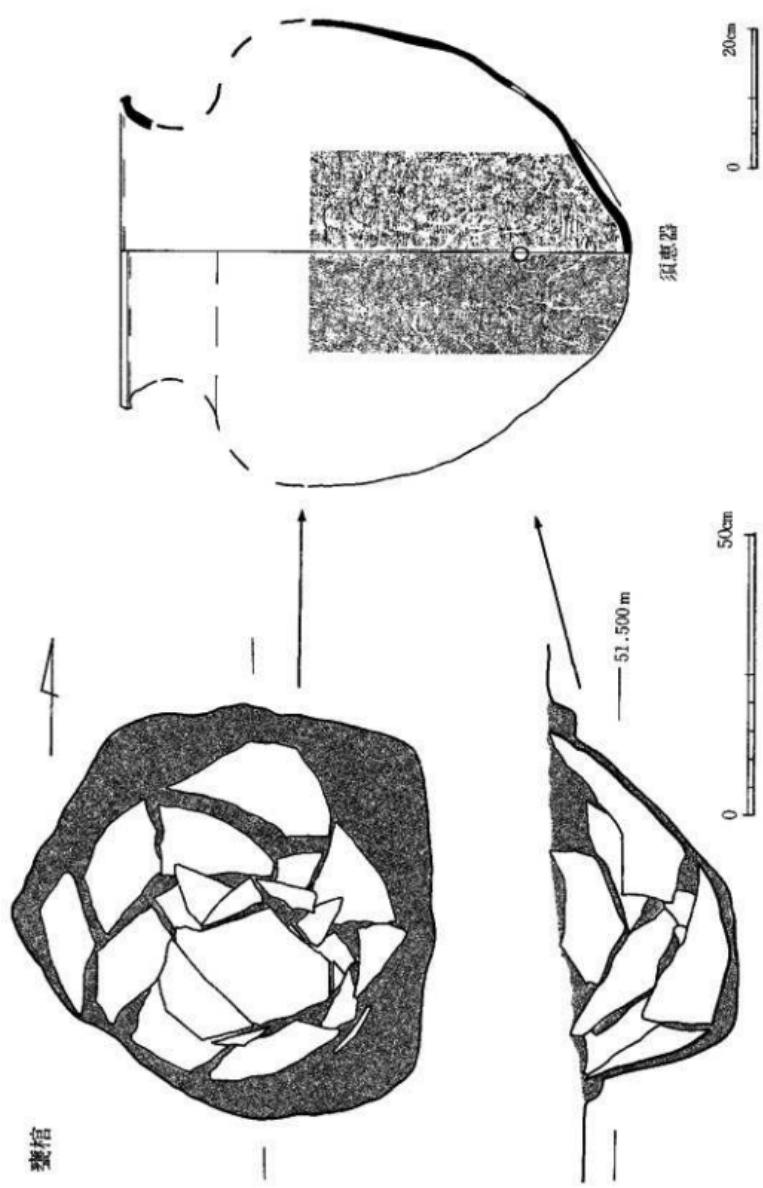
4 3 に同じ



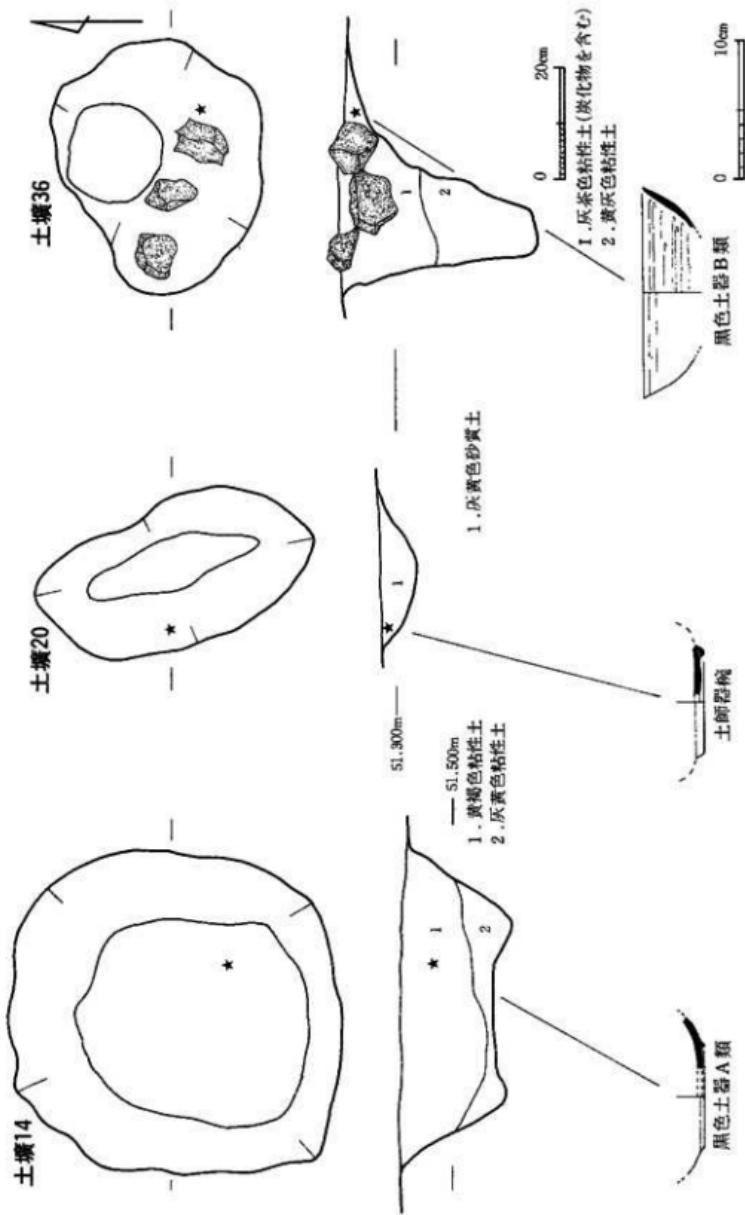
A —————— A' 50.500 m



第9図 流水路・遺物、遺構実測図



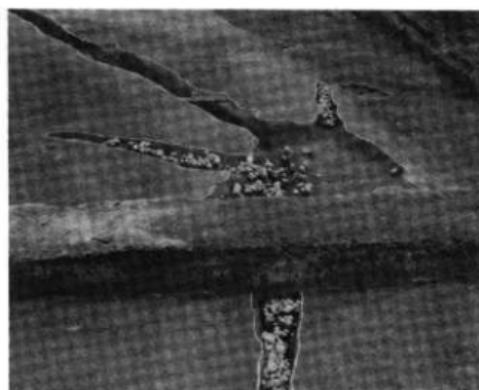
第10図 土壌12遺物・遺構実測図



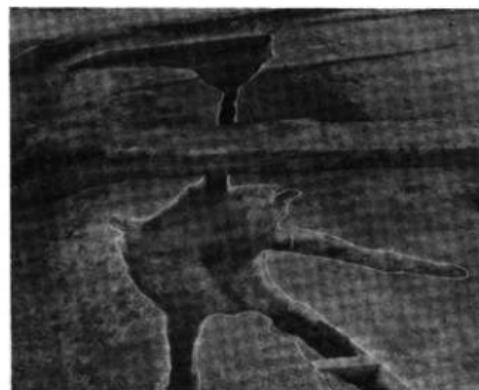
第11図 土塚14、20、36遺物・遺構実測図



1. 10~16—F~M地区
流水路全景
(南より望む)

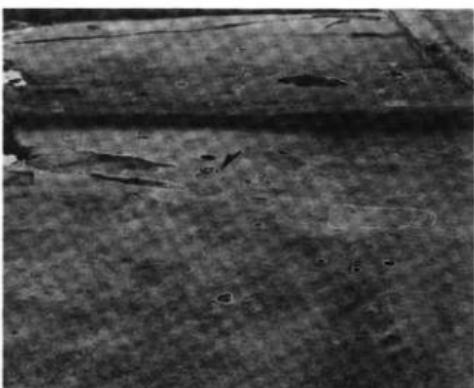


2. 14~15—H~K地区
盲暗暗渠の検出状況
(北より望む)

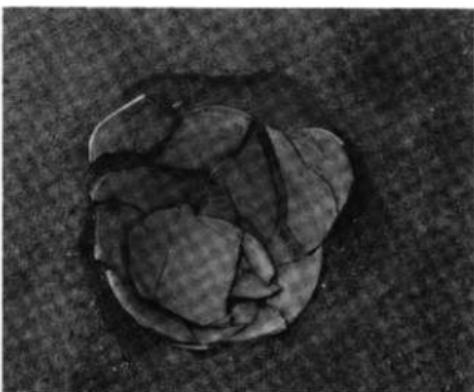


3. 14~15—F~J地区
盲暗暗渠の礫、除去後
(南より望む)

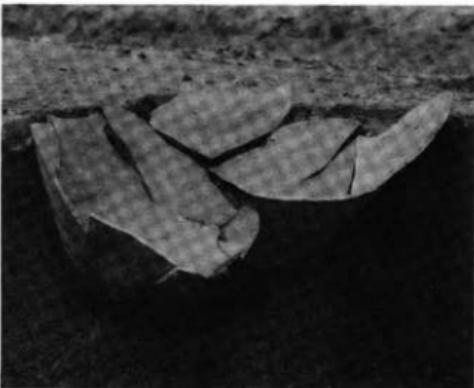
4. 3~15—I~N地区
造構分布面全景
(東より望む)



5. 5~6—L地区
土壤12、甕棺出土状況
(東より)



6. 5~6—L地区
甕棺埋置状況
(東より)



縄文セトルメントパターン概要

野畠遺跡には、埋没冲積低位段丘面を利用する縄文時代後期前葉～縄文中期末期にかけての文化層が、層相関係をもって3面存在する。第12図は、層位別区分による遺物・遺構分布範囲の変移を図式化した野畠縄文セトルメントパターンの一試みである。

上下層位の重複プランは、最上位である第Ⅲ層下部、縄文後期前葉期(北白川上層式1・2期)、第Ⅳ層、縄文後期初頭～中期末期(中津、福田K II式～星田、北白川C式)、第V層、縄文中期末期(星田式)に層位型式学的に把えられた。層位別区分による文化層は、小単位の在り方を示し、性格を異なる土壌、遺棄(放置)、機能損失遺物の保有する廃棄処分といった相互の偏在パターンで構成されている。すなわち立地条件に適応し集約された一定範囲での遺物・遺構パターン現象において、人間行為による次元的推移の過程で形成要因をなした傾向性は、丘陵利用による人間行動の反映と活動場として解釈できよう。

遺物の遺存状況について

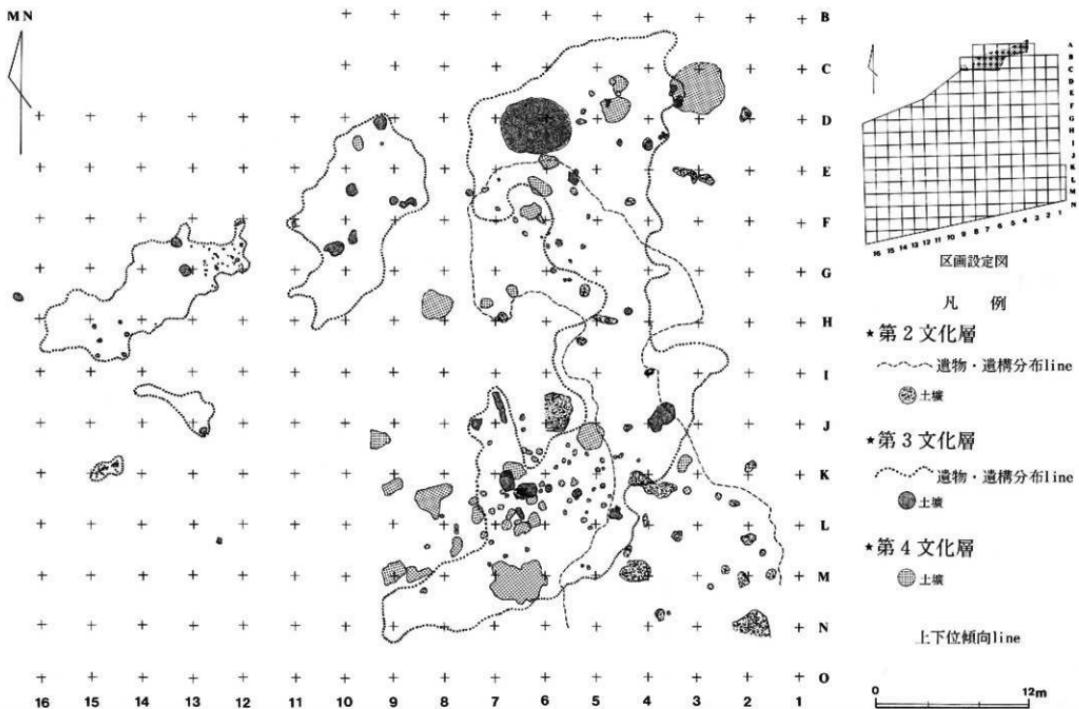
出土遺物は、層位的な根拠に基づき文化層位別によるカテゴリーに大別される。一定量の石器、土器、炭化物、自然礫は凡て回収しており、遺物組成比が把握できた。偏重的であるが、各時期毎の器種組成、数量、比率関係を主要点に置き後述する。ちなみに、石器は単位集団が普遍的に備していいた生産道具である。携帯していた道具類の構成は、石器製作、使用、機能損失といった一連の行為によつた各々の遺物から推測できる。

ところで、層相関係をもつて包含する遺物の遺存形状(破損度)について、石器は土器の遺存率に対して一定の形態を有する維持率は高く多数認められ、土器に至つては、完形品は認められず使用不能になつた破損した土器である。第Ⅲ層、明黄褐色(10YR7/6)酸性化による軟質微粘性土壤に含む遺物は、風化作用を受け遺物成分の含有する抵抗度の破壊が認められ保存度は不良である。第Ⅳ層、灰褐色(5YR4/2)、第V層、褐灰色(7.5YR4/1)有機質粘性土壤に含む遺物に至つては、上層遺物よりも保存度良好である。

文化層の遺物・遺構群の平面分布位置図は、凡例に記するように遺物器種別による記号化を試み作製した。石器の先端部は方向を点示している。頻度数のある遺物分布範囲においては、概数的なドットマップを点示し遺物の実数には若干の変更もある。

次頁より、遺物・遺構平面分布位置図と図版を併用して順次、セトルメントパターンの概要を記述する。

器種別記号	凡例
● 土器	
▲ 石器	
★ 削器	
▼ 石錐	
△ 楔形石器	
■ サヌカイト原礫	
◎ 石核	
○ 刺片	
● 磨製石斧	
□ 磬器	
■ 敲石	
□ 磨石	
■ 台石(凹石)	
◆ 石錐	
■ 砥石	
○ 自然礫	



第12図 第2～4文化層、重複分布範囲図

第2文化層

第13図に示す遺物・遺構平面分布図は、第Ⅲ層下部に包含する縄文後期前葉（北白川上層式1・2期）期に比定される分布面を示す。分布面は、調査区全域に存在するのではなく、1～7-C～M地区を南北に縦断する規模を有し、面積約500m²に及んでいる。一定範囲内に密集度の濃厚な遺物・遺構は、フラット面上に共有性をもって存在する。検出面は、プライマリーな状況を保持し、單一的に分布を示す複数のブロックで構成されているものとして把握できるものではない。しかしながら、遺物状況位置の相互において、器種別の相関関係によっては、分離できる可能性も考えられる。

第Ⅲ層下部に存在する遺物は、原位置状況を残す遺棄と廃棄処分による遺物とに大別できる。次に原位置状況を示唆できる明確な遺物について記述する。

原位置状況を有する遺物について

5-H地区（図版5-13、14）に位置し、同一母岩からなる3点のサヌカイト剝片が水平に密着した状況で検出された。このうち2点の剝片が接合する資料である。接合剝片の隣接地に焼土塊第7・8号がある。遺物として、削器2点、楔形石器6点、石核1点、剝片・碎片54点、微量の北白川上層式2期に比定される羽状縄文を施す浅鉢、粗製無文土器などが平面的位置関係にある。

4-J地区（図版5・6-15、16）に位置し、段丘礎の上下間に固定されたサヌカイト素材の削器が挟まれた状況で検出された。目的か意図については、不明である。置き礎間に固定された削器を検出した隣接地に土塊第11号がある。遺物として、削器2点、楔形石器2点、石核2点、剝片・碎片7点、微量の北白川上層式2期に比定される有文深鉢、粗製無文土器などが平面的位置関係をもって分布している。

1-L地区（図版6-17、18）の東拡張部では、良好に遺存するサヌカイト素材の石核、剝片が平面的に集積状況を示す遺棄された遺物である。集中的に置れた範囲は、長辺23cm、短辺19cmを測る。器種内容は、カッティングのある剝片2点、リタッチのある剝片1点、剝片素材の石核2点、剝片13点で構成され、道具としての機能目的を果す石器製品は存在せず、意図的に副産過程で遺棄したものと看取できよう。18点で構成する集積において、同一母岩からなる継長剝片3点の、接合関係にある資料を得た。同一母岩からなる石核は存在しない。また、単独で存在した集積地と至近距離(1・2-K・L地区)にある遺物分布地とは有機関係にある。

土壤群

第13図に示す土壤群は、分布範囲内で形状の差違がある土壤29基で構成する不規則な土壤群である。大部分の土壤は、焼土、炭化物を混じえる褐土である。これらの土壤全体数に対しての比率27.5%から稀少な遺物が出土している。

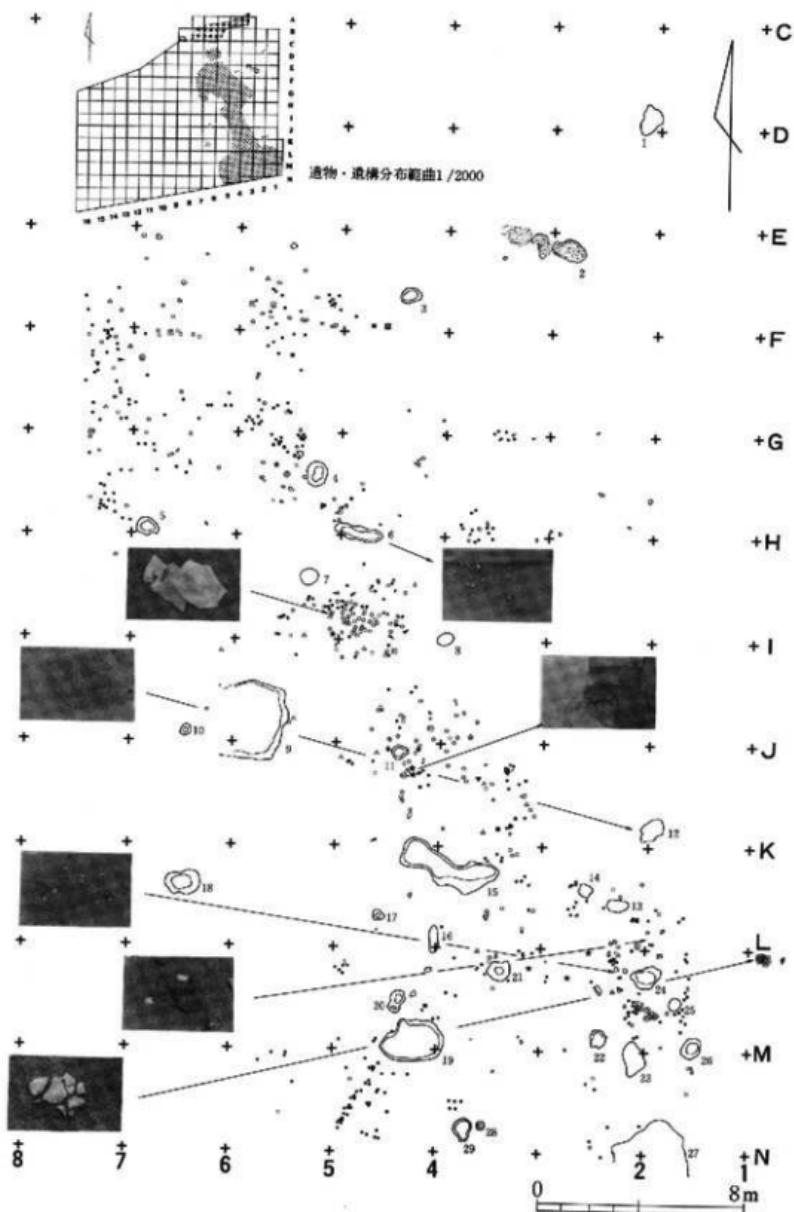
出土遺物

石器・土器遺物について、器種別による組成数量を明記する。石器、石核、剥片・碎片(0.1~10cm未満)は、分布面306点、土壤内出土の全体数215点、総計521点に及ぶ数値を呈示できる。土器に至っては、分布面において、精製・粗製土器残片を含めて約500点の概算的な出土数値である。土壤に伴出する土器は、石器を覆土にもつ土壤番号と合致する。

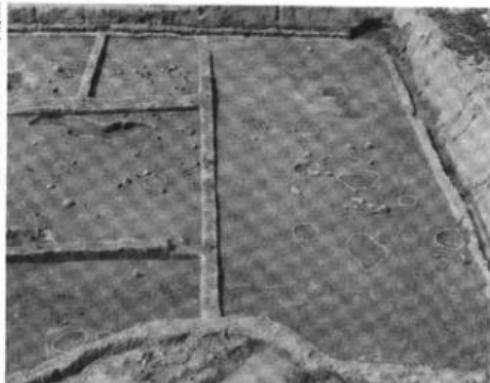
第Ⅲ層下部に分布する石器、石核、剥片組成	数量	石器比率	全体比率
石 鐵	16点	21.1%	5.2%
削 器	13点	17.1%	4.2%
石 匙	2点	2.6%	0.7%
石 錐	2点	2.6%	0.7%
楔 形 石 器 (スボール含む)	32点	42.1%	10.5%
磨 製 石 斧	1点	1.3%	0.3%
礫 器	0点	0.0%	0.0%
敲 石	7点	9.2%	2.3%
磨 石	1点	1.3%	0.3%
台 石 (凹石)	1点	1.3%	0.3%
延 石	1点	1.3%	0.3%
サヌカイト原礫	4点		1.3%
石 核	17点		5.6%
剥 片	209点		68.3%
合計	306点	99.9%	100.0%

土壤に伴う石器剥片組成

上 壤 第1号 剥片194	194点	90.2%
上 壤 第2号 石鐵1	1点	0.5%
上 壤 第3号 剥片1	1点	0.5%
上 壤 第4号 石鐵1、剥片1	2点	0.9%
上 壤 第6号 剥片3	3点	1.4%
土 壤 第9号 石鐵1、剥片7	8点	3.7%
土 壤 第18号 楔形石器1	1点	0.5%
土 壤 第27号 剥片5	5点	2.3%
合計 215点		100.0%



第13図 第2文化層、遺物・遺構分布図



7. 1~4—I~M地区
遺構分布面全景
(東より望む)



8. 1~2—K~L地区
遺物分布状況
(東より望む)

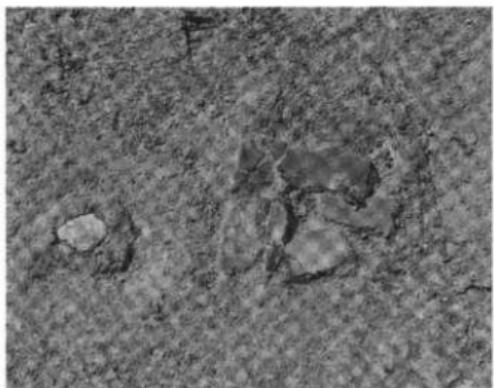


9. 6—C~D地区
廃棄磚ブロック
(東より)

10. 1~2-L地区
土器、石器出土状況
(南より)



11. 2-K~L地区
土器、石核出土状況
(南より)

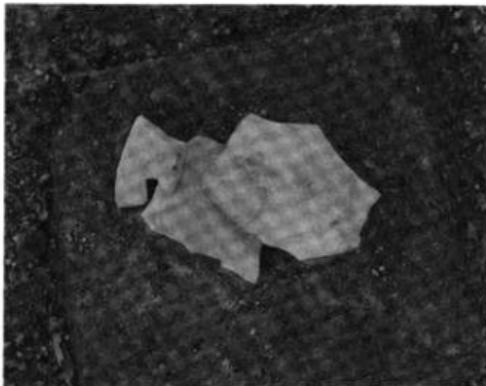


12. 1-K~L地区
土器、石器、砾出土状況
(南より)





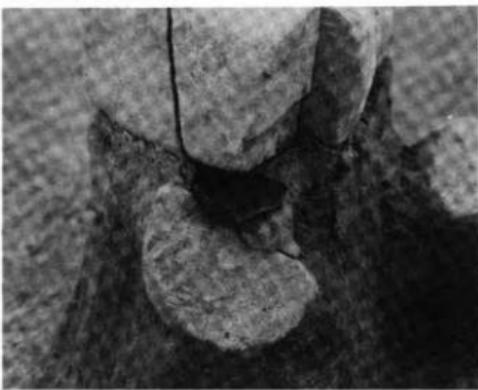
13. 4～5—H～I 地区
土器、石器分布状況
(南東より望む)



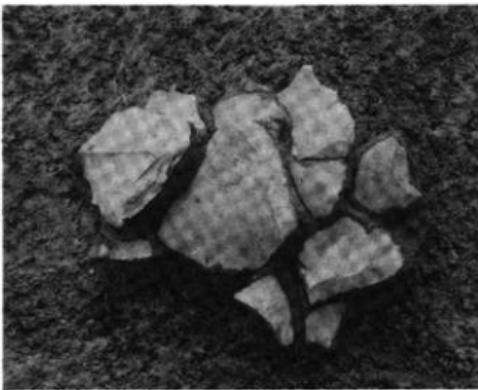
14. 5—H 地区
同一母岩による制片出土状況の接写 (西より)



15. 4—J 地区
礫間に挟まれた削器の出土
状況 (北より)



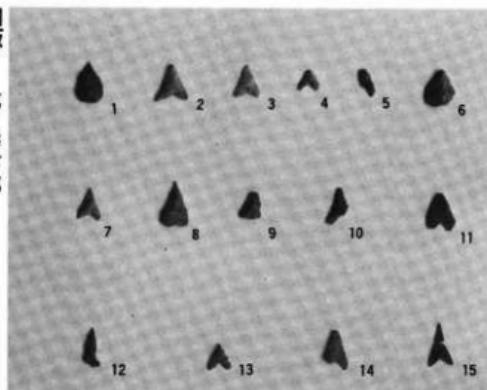
16. 4-J地区
削器の出土状況の接写
(東より)



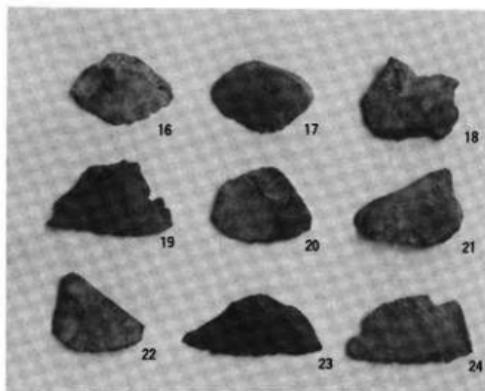
17. 1-L地区東拡張区
石核、制片類遺棄ブロック
(南より)



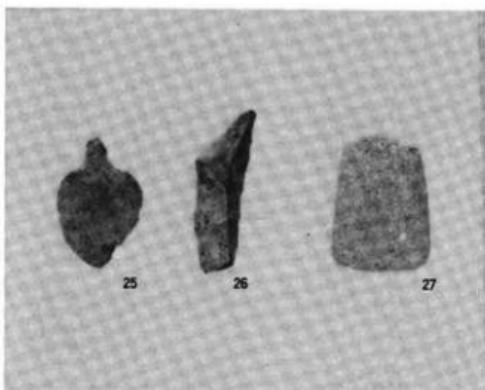
18. 1-L地区東拡張区
石核、制片類遺棄ブロック
セクション (北西より)



19. 石鏽、1~15



20. 削器、16~24



21. 石錐、25.26·磨製石斧27



22. 深鉢土器28



23. 浅鉢土器29

第3文化層

第14図に示す遺物・遺構平面分布図は、第IV層（遺物包含層）に包含されている縄文中期末（星田一北白川C式）期に比定される分布面を示す。ベルト状に展開する分布範囲は、約900m²に及ぶ規模である。第IV層の層理面上には、後期初頭期の中津式、福田KⅡ式土器が微量に混在するが、遺物包含層は、密度の濃厚な範囲と散漫的（バラツキ）に分布している地域とに区分できる。これらの分布遺物は、人間の行為による遺棄と廻棄遺物に大別できる。概して記すると堆積土壤内に機能を喪失した消耗遺物（石器・土器）が大部分であり、層理面上に至っては、原位置状況を考慮できる單一的な遺棄遺物が存在する。原位置状況を示唆できる明確な石器群、土壤、廻棄礫ブロックについて概述する。

原位置状況を有する遺物について

層理面上において、同一器種からなる完形の磨製石斧、磨石を各2個単位とする遺棄された石器群を地区別に検出した。両器種は、平面分布を示し至近距離間での位置関係にある。4-J地区（図版12-33、34）において、同一石材の蛇紋岩製大型磨製石斧2点が水平に重ねられ、刃縁部は西方向を差している。3-J、4-I地区（図版12-35）においては、円形、梢円形を呈する挙大の磨石2点が両地区で単位的に設置されている。

土壤、廻棄礫ブロック

層理面上より形状に差異が認められる土壤49基を検出した。土壤の分布は、包含層の形成範囲とは、共通し整合する。しかしながら、偏在的に密集する分布範囲の南西部（8-16-J～M地区）に至っては、拡散する遺構（土壤、廻棄礫ブロック）などが土地の空間的利用において、稀少な分布の在り方を示している。

廻棄礫ブロック1、2について概述すると、第IV層下部（第V層漸移面）より一定範囲内に集中的に廻棄したと考えられる礫ブロック1では、土壤第22-27号と共有関係をもつ可能性も考えられる。礫ブロック2については、単独で存在している。

礫ブロック1（図版10-28）は、12-F地区に位置し、3×2m範囲より散在的に挙大の礫、小礫が約35個集石するに相違して、礫ブロック2（図版10-29）においては、14-J地区に位置し、2×1mの狭小な範囲に挙大の礫、小礫が約50個集石されており、敲石、磨石などが混在していた。

両礫ブロックの遺存状況については、完形あるいは破損礫が単位的に分布しており、少量の礫には火熱による赤化がみられ、焼けによる熱破碎礫が若干混在していた。礫ブロックは、規則的な配置関係を示すものではなく機能を失った不用な礫を小範囲に廻棄処分したと考えるのが妥当と思われる。以上、礫ブロックについて記述してきたが、礫の内包している属性的情報（破損礫相互の接合関係、熱ルミネッセンス、残存脂肪酸）による分析を通じて、再整理を試みなければならぬ。

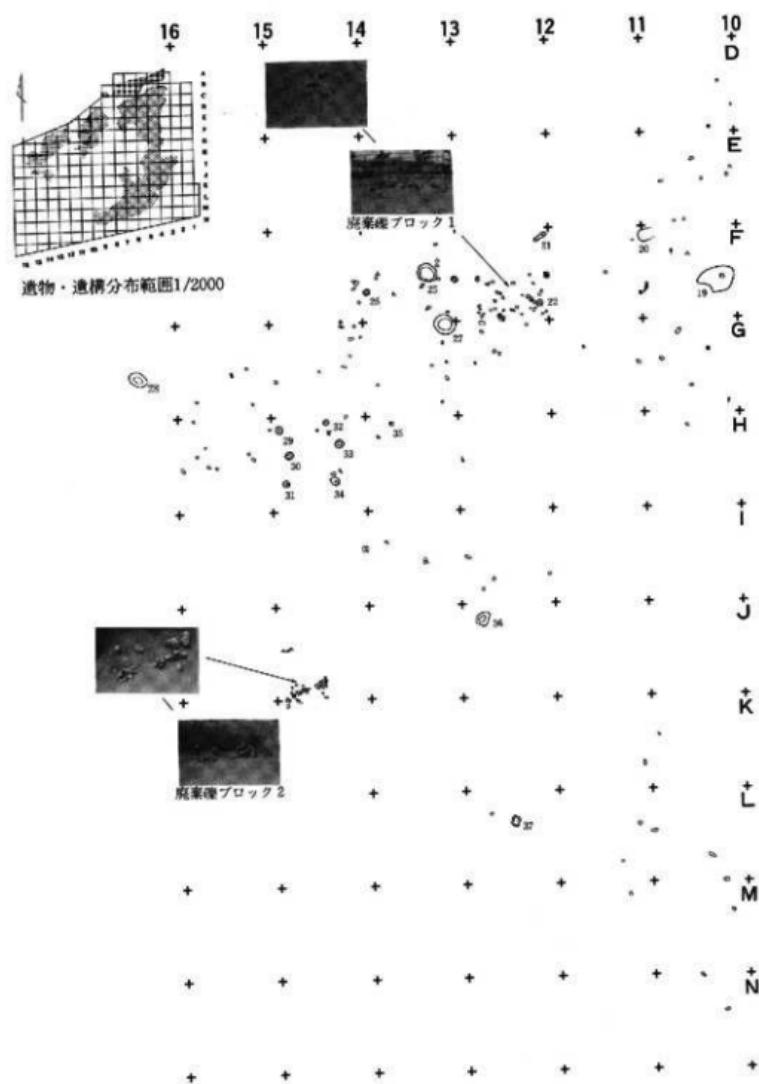
出土遺物

石器、土器遺物について、器種別による組成数量を明記する。石器、石核、剝片・碎片（0.1～10cm未満）は、包含層内523点、土壤内出土の全体数43点、総計566点に及ぶ数値を表示できる。土器に至っては、精製、粗製土器の残片を含めて1000点以上の概算的な出土数量である。各土壤に伴う土器は、土壤全体数に対しての比率は14.2%で、石器を覆土にもつ土壤番号と合致し微細な土器が共存する。

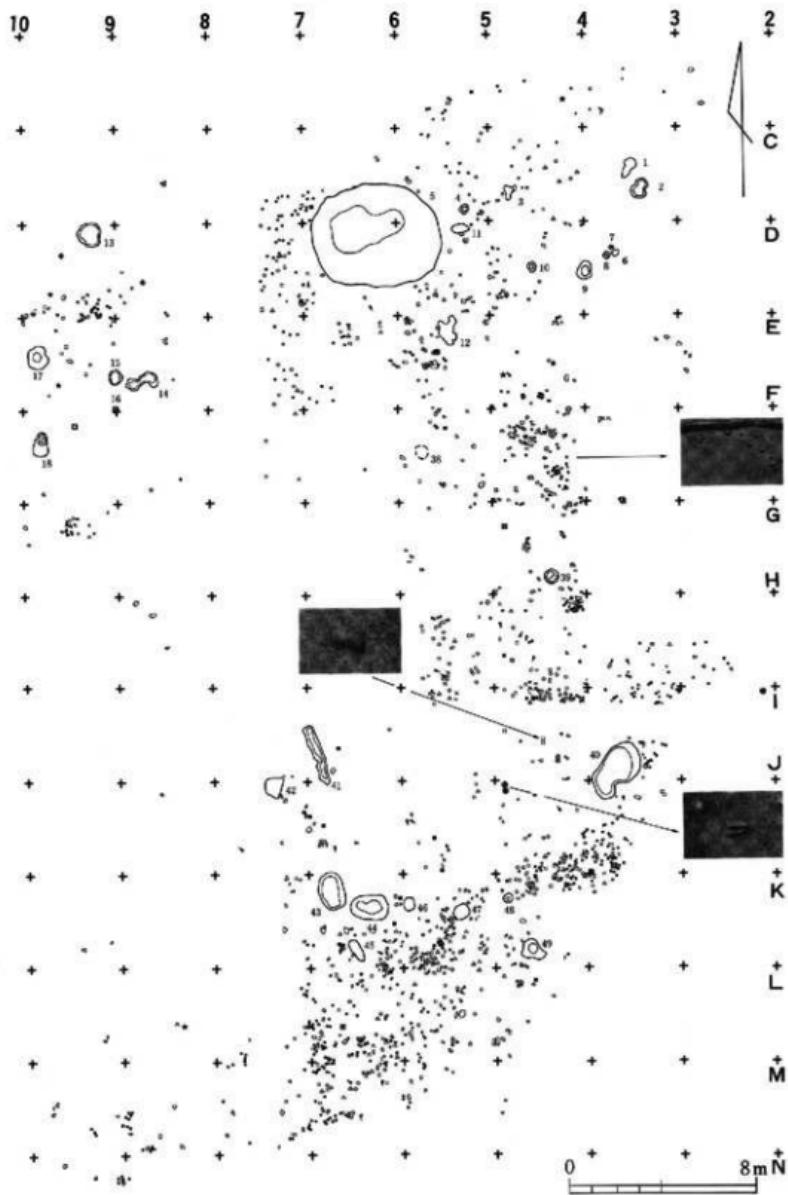
第IV層に分布する石器、石核、剝片組成	数量	石器比率	全体比率
石 錐	41点	18.6%	7.8%
削 器	20点	9.0%	3.8%
石 匙	2 点	0.9%	0.4%
石 錐	1 点	0.5%	0.2%
楔 形 石 器 (スボール含む)	87点	39.4%	16.6%
磨 製 石 斧	4 点	1.8%	0.8%
礫 器	2 点	0.9%	0.4%
敲 石	26点	11.8%	5.0%
磨 石	21点	9.5%	4.0%
台 石 (凹石)	6 点	2.7%	1.1%
砥 石	1 点	0.5%	0.2%
打 ち 欠 き 石 鍤	10点	4.5%	1.9%
石 核	11点		2.1%
剝 片	291点		55.6%
合 計	523点	99.5%	99.9%

土壤に伴う石器、剝片組成

土 壤 第 5 号 石錐 3 、石錐 1 、楔形石器 2		
磨石 1 、剝片 13	20点	46.5%
土 壤 第 9 号 削器 1 、剝片 3	4 点	9.3%
土 壤 第 13 号 剥片 1	1 点	2.3%
土 壤 第 14 号 剥片 4	4 点	9.3%
土 壤 第 15 号 剥片 6	6 点	14.0%
土 壤 第 27 号 剥片 7	7 点	16.3%
土 壤 第 39 号 打ち欠き石鍤 (素材) 1	1 点	2.3%
合 計	43点	100.0%



第14図 第3文化層、遺物・造構分布図



第15図 第3文化層、遺物・遺構分布図

第4文化層

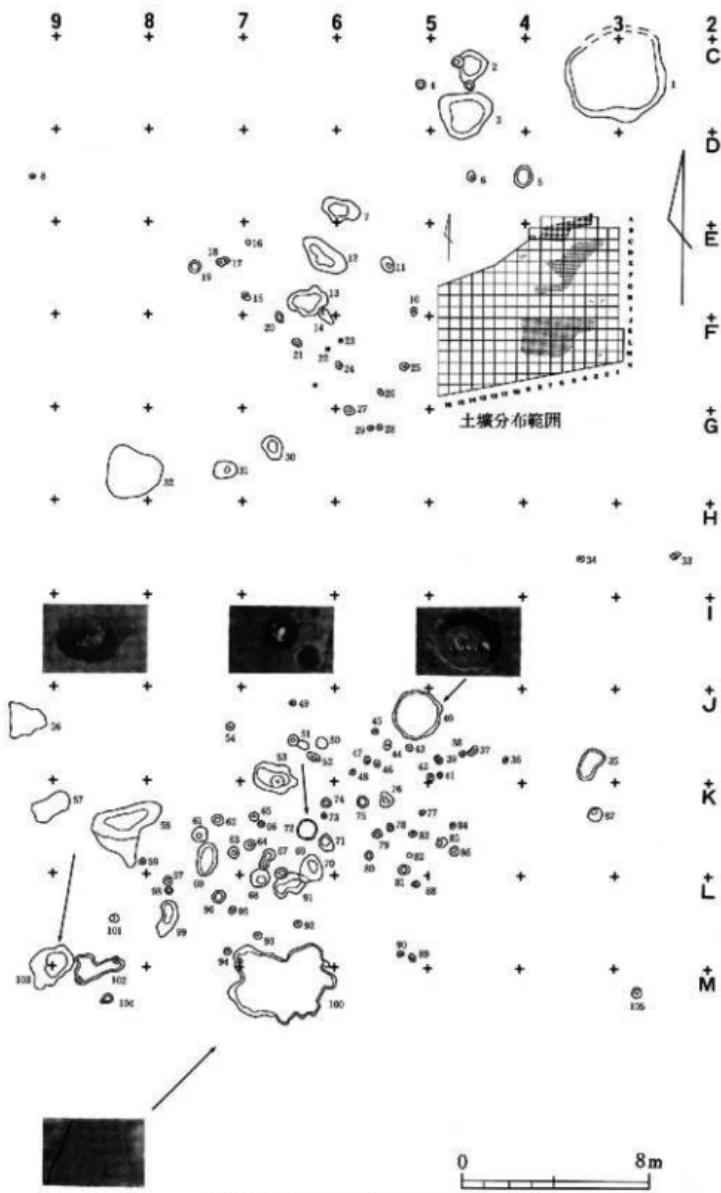
第16図に示す土壤平面分布図は、第V層（上位文化面の層相となる基盤）直上より縄文中期末期に位置づけられる星田式併行に伴う105基の土壤群で構成する。土壤の分布範囲は、2～9—C～M地区にかけて約1000m²に及ぶ。第1～34、105号の土壤が拡散的に分布するのに相違して、第35～104号の土壤は偏在的に分布する。土壤の形状は、企画された円形状土壤第40号（図版11～30）や不規則な土壤がある。

土壤に伴出する遺物は、土壤形状の規模的な差異を考慮しなければならないが量的に保障される土壤と微量の遺物を覆土内にもつ土壤とに大別できる。覆土遺物を有する土壤全体数に対しての比率は30%である。大部分の覆土遺物は、ランダム的な堆積で、遺棄された一括資料の伴出する土壤は存在せず機能損失による廃棄遺物が大半である。

出土遺物

土壤に伴出する器種別による石器、剝片組成数量を明記する。土器に至っては、器種別による土器型式の明確な精製、粗製土器を微量に含んでいる。なお、土器は石器を覆土にもつ土壤番号と合致している。

第V層 土壤と伴出する石器、剝片組成	数 量	全体比率
土 壤 第1号 楔形石器4、剝片50	54点	13.2%
土 壤 第2号 剥片1	1点	0.2%
土 壤 第6号 剥片4	4点	1.0%
土 壤 第7号 剥片5	5点	1.2%
土 壤 第11号 剥片1	1点	0.2%
土 壤 第12号 石鏃1、楔形石器2、剝片8	11点	2.7%
土 壤 第13号 剥片10	10点	2.4%
土 壤 第16号 楔形石器1	1点	0.2%
土 壤 第20号 剥片1	1点	0.2%
土 壤 第21号 剥片1	1点	0.2%
土 壤 第24号 楔形石器1	1点	0.2%
土 壤 第27号 剥片7	7点	1.7%
土 壤 第40号 石鏃8、楔形石器9、敲石2 磨石2、台石（凹石）1 打ち欠き石錐（素材）1		
剝片127	150点	36.6%
土 壤 第50号 石鏃1、剝片2	3点	0.7%
土 壤 第53号 剥片1	1点	0.2%
土 壤 第58号 石鏃1、剝片3	4点	1.0%



第16図 第4文化層、遺構分布図

土 壤	第61号	石鏃 1、剥片 2	3 点	0.7%
土 壤	第62号	剥片 2	2 点	0.5%
土 壤	第66号	磨石 1	1 点	0.2%
土 壤	第70号	剥片 4	4 点	1.0%
土 壤	第71号	楔形石器 1、剥片 6	7 点	1.7%
土 壤	第72号	石鏃 1、削器 1 剥片 14	16点	3.9%
土 壤	第73号	楔形石器 2	2 点	0.5%
土 壤	第75号	剥片 3	3 点	0.7%
土 壤	第77号	石鏃 1	1 点	0.2%
土 壤	第91号	石鏃 1	1 点	0.2%
土 壤	第97号	剥片 1	1 点	0.2%
土 壤	第99号	剥片 1	1 点	0.2%
土 壤	第100号	石鏃 5、楔形石器 4 剥片 42	51点	12.4%
土 壤	第101号	磨石 1、台石（凹石） 1	2 点	0.5%
土 壤	第102号	楔形石器 3、剥片 18	21点	5.1%
土 壤	第103号	石鏃 2、楔形石器 4、敲石 1 磨石 2、剥片 30	39点	9.5%
		合 計	409点	99.4%

IV. 結 語

野畠遺跡第2次発掘調査の概要報告を第I～Ⅲ章において紹介し、第1～4文化層に小括される問題を指摘してきた。言及するまでもなく、遺物・造構の諸要素の具体的（原位認論）議論をできる静止状況にある人間生活の痕跡は、寄り多くの情報を提供るものである。今後、文化層の解釈をめぐっての課題を近い将来に残し結語としたい。

調査成果

- ・古代～中世期についてであるが、調査区13～15-F～N地区にかけて単独で存在した流水路の機能年代については、永享年間（1429年）桜井郷『春日社神供料所撰州桜井郷本新田畠三帳』の記帳による春日社領垂水西牧桜井郷主要地図より、永享年間に該当地を含む千里川流域（野畠、少路、内田）一帯において、桜井郷の在地土豪によって丘陵開拓（農地開発）が組織的に規則され、疊暗渠の施設をもつ流水路が丘陵開拓に設備されたものだと想定できよう。また、桜井郷文書に記帳された年代と流水路に伴出した中世遺物類が相当する帰属年代が一致し、流水路の下限を知る上で微証されたことになる。

土壤群は、同一層理面上に年代的な差違を示す土壤が拡散的に75基分布する。土壤第12分は、所謂、壺棺と考えられ、共時性を有して存在する遺構は認められず単独で存在した。人骨を転用した埋甕は、桜井谷窯業期、終焉段階に生産された8世紀前半期に比定されるものである。遺存状況は悪く棺内に人骨、副葬品は皆無であった。

他の土壤群は、覆土遺物から推測すると9世紀～11世紀にかけての年代幅がもたれる。すなわち、桜井谷丘陵において、桜井谷古窯跡群が衰退、崩壊に至るまでの時期的な推移の過程で土地利用によった複合土壤である。土壤の機能については、留意点を残すが、隣接地域での該当する遺跡の在否について今後、問題を残すことになった。

- ・縄文時代後期前葉期～縄文中期末にかけての文化層において、有機的に関連づけられる上下位の文化層は、整合し遺棄、廃棄遺物ブロックの集合からなる。傾向性をもって偏在的に存在する最小単位での連続行為による在り方は、人間行動の実態における諸要素の問題を提起した。

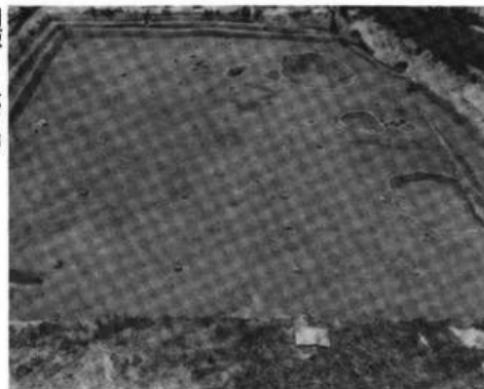
文化層の埋没する成因現象は、該当期の層理面が旧地表層にあって遺棄、廃棄、残滓遺物、土壤といった散布地である。静止する原位置の遺物から検証する限り、アシデンタルな生活基盤の破壊による2次的堆積層（擾乱層）と理解されるのではなく短期間に文化層が存在し即時埋没した可能性が強いと考えられる。

あとがき

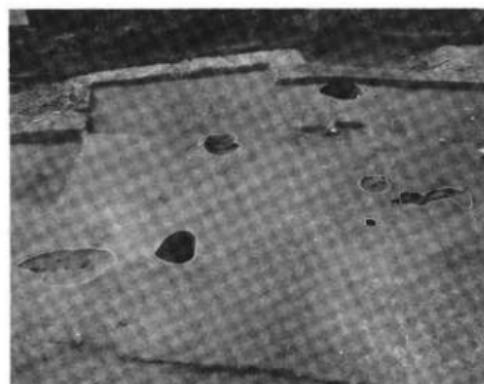
行政的対応を余儀なくされた概報書は、専任者が期間の制約によって基本的なデータ整理に終始一環してしまい、個人の能力に限界を感じ不満な点を多寡する予備報告となつた。概報書作成の意図は、ランダム方式に遺跡の諸様相の観点から時代的序列に従い遺物、遺構を抽出した報文ではない。概要内容を既述してきたが、巨視的な立場から偏重する観点での上下位に包括する人間行動による偏在パターンの在り方について、重点を置き要約した概要文である。

総括責任は、専任者である筆者一人に帰するものである。

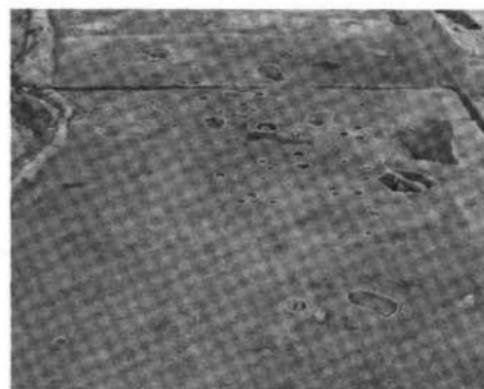
現在もなお、継続的に少數の調査者で整理作業を実施しており近い将来、正式な発掘調査報告書の運びとなろう。



24. 1～7—C～H地区
遺構分布面
(東より望む)

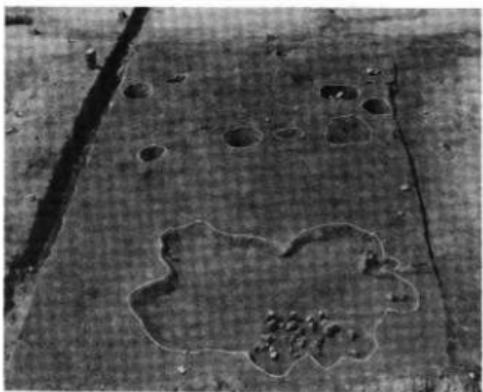


25. 8～10—E～G地区
遺構分布面
(南より望む)

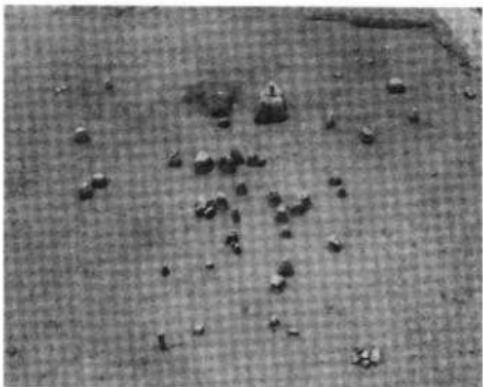


26. 1～9—J～M地区
遺構分布面
(東より望む)

27. 6~7—J~M地区
透構分布面
(南より望む)



28. 12~13—F~G地区
廃棄棟ブロック 1
(東より望む)

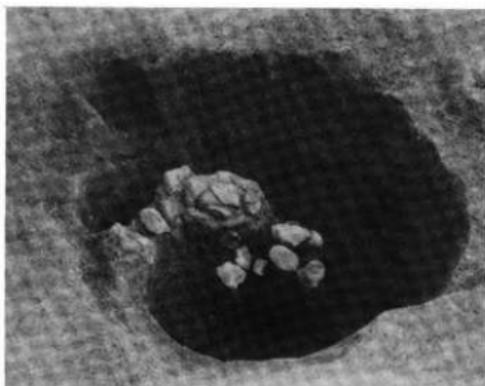


29. 14—J~K地区
廃棄棟ブロック 2
(北より望む)

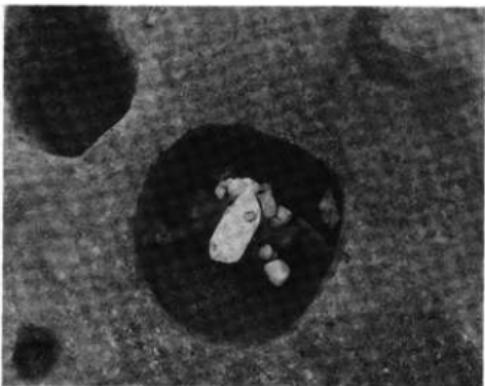




30. 4~5-J地区
土壤第40号
(西より)



31. 8~9-L~M地区
土壤第103号
(南より)

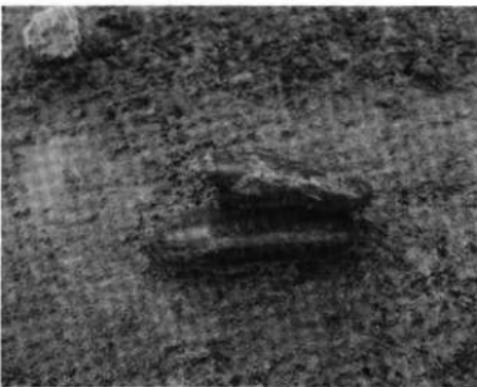


32. 6-K地区
土壤第72号
(南より)

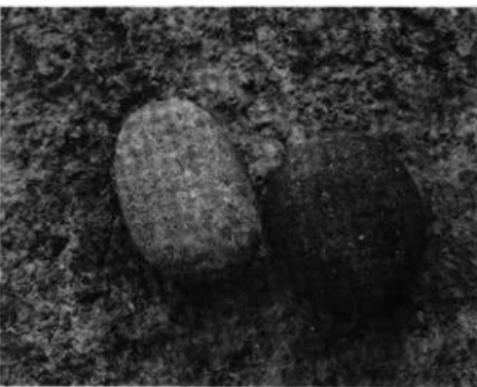
33. 4—J地区
磨製石斧出土状況
(北より)

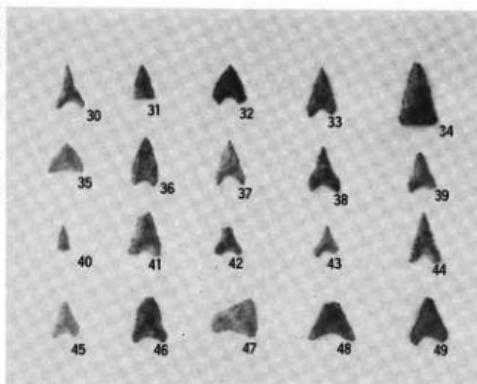


34. 4—J地区
磨製石斧のセクション
(南より)

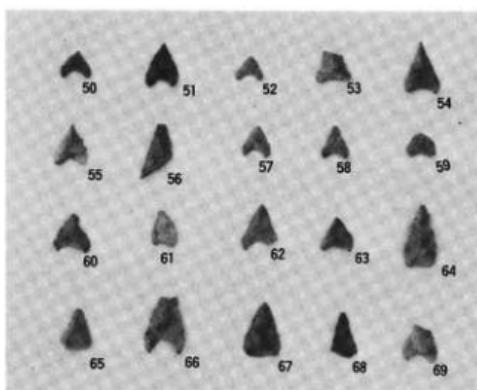


35. 4—I地区
磨石出土状況
(西より)

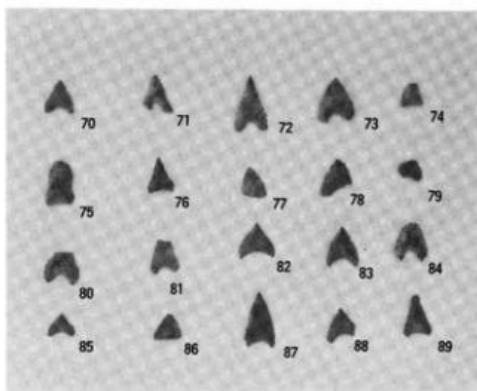




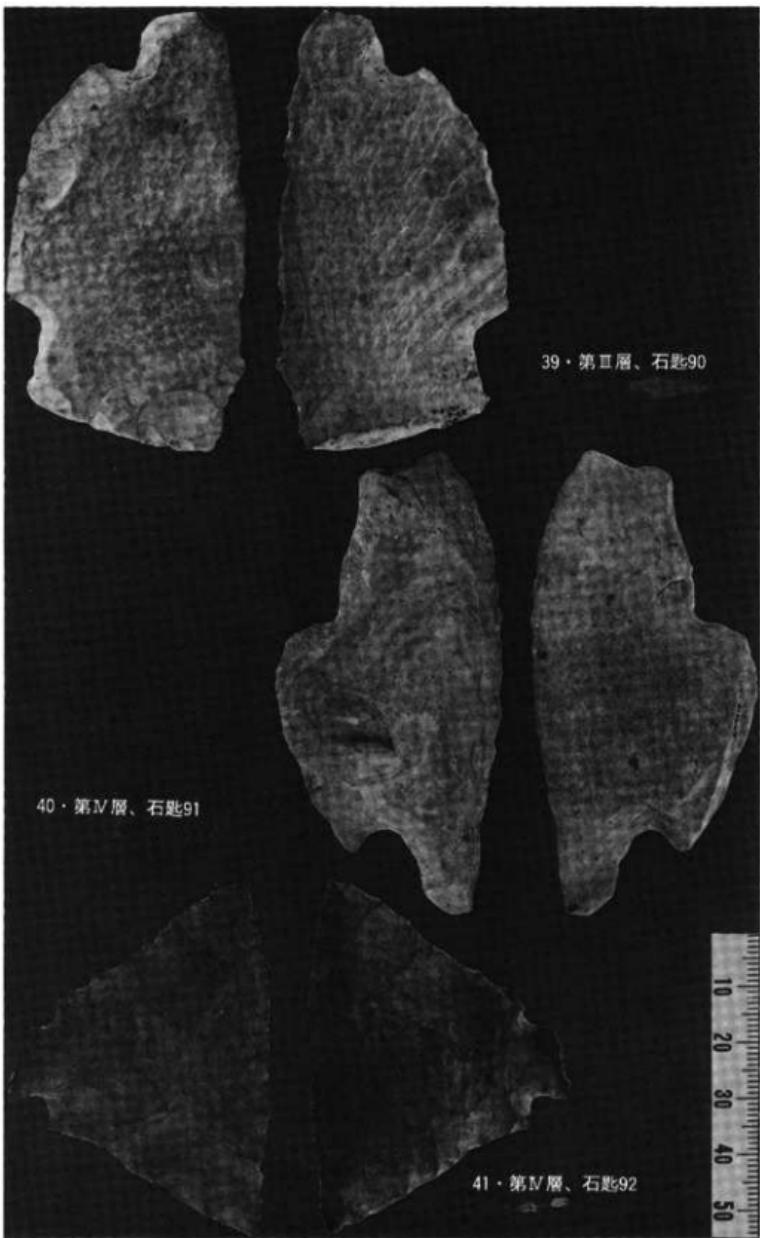
36. 第IV層
石鑽、30~49

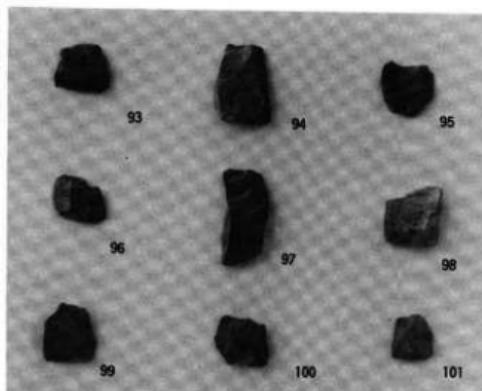


37. 第IV層
石鑽、50~69

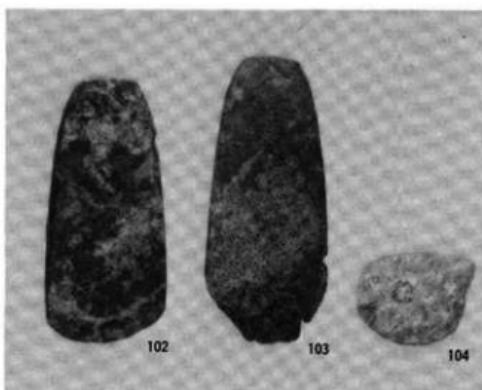


38. 第V層各土壤
石鑽、70~89

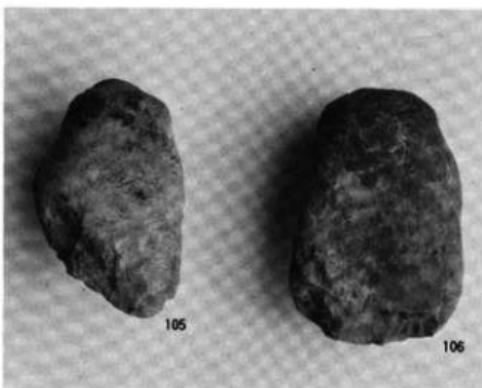




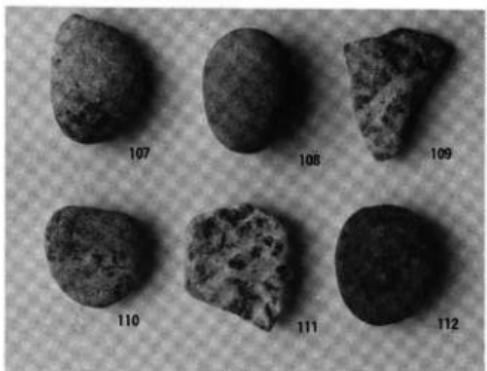
42. 楔形石器、93~101



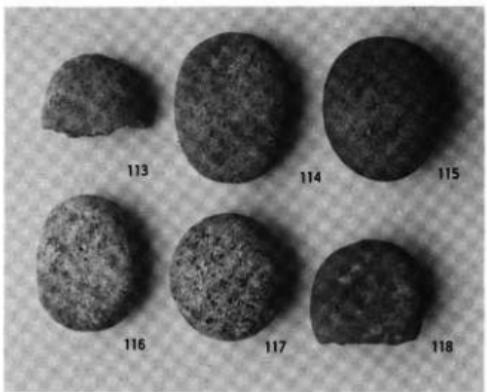
43. 磨製石斧、102~104



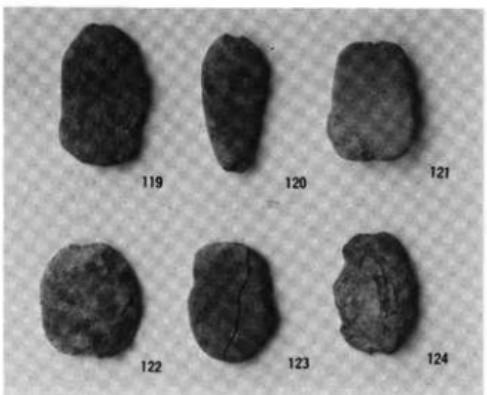
44. 碾器、105~106



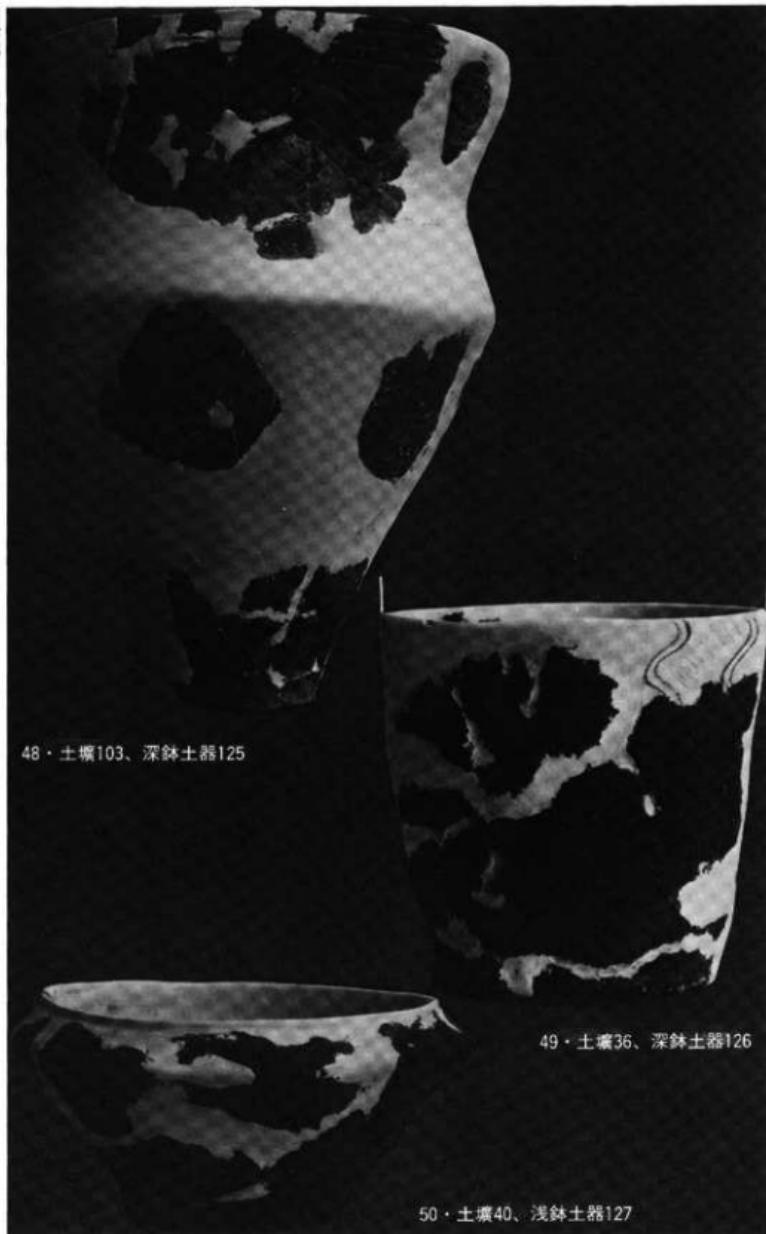
45. 敲石、107~112



46. 磨石、113~118



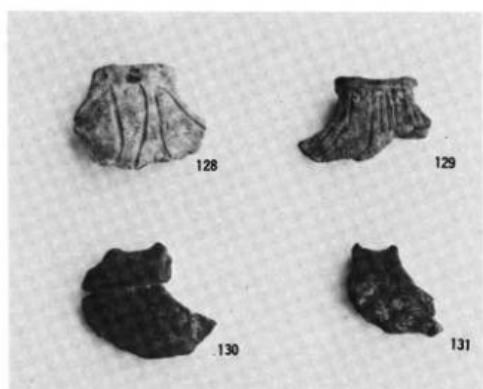
47. 打ち欠き石錘、119~124



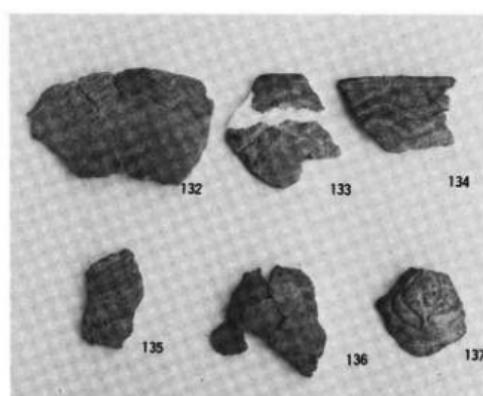
48・土壤103、深鉢土器125

49・土壤36、深鉢土器126

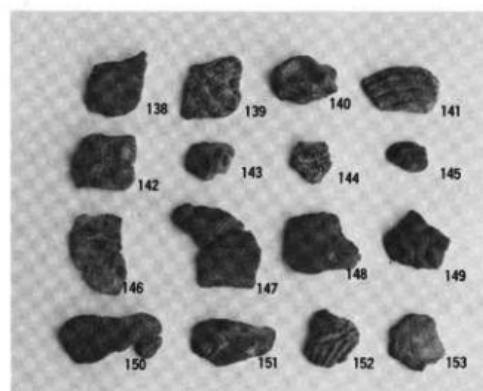
50・土壤40、浅鉢土器127



51. 深鉢土器 (有文土器)
128~131



52. 深鉢土器 (有文土器)
132~137



53. 深鉢土器 (有文土器)
138~153

豊中市文化財調査報告第18集
野畠遺跡 第2次発掘調査概報

1986年3月

発行 野畠遺跡発掘調査団
編集 同
印刷 株式会社 中島弘文堂印刷所